

進化するブランドSTORY

第4回

GUCCI

伝統と革新と新デザイナー

今年で創業85周年を迎えた「ゲッチ。老舗の伝統的なDNAを受け継ぎながらも、最先端ブランドとして君臨する、いつの時代も人々を魅了し続ける柔軟性のあるそのスタイルは、まさに進化するブランドの象徴です。

撮影／平井敬治(モトヤマ／ViViD) 安井真喜子(静物) ハマクサ/石塚千絵子(SiNCO) メーク/柄木 進(juice) スタイリング/橋本早苗 構成/選ばん

「グッチはモード界のユニクロだね！」
と言つたテレビプロデューサーがいる。

そんな時流に乗るドライブ感とともに、このブランドにはどこか人間的な淒みを感じさせる。ニシハラの手口に

変貌し続ける原動力は?

中野香織

進化するブランドSTORY

安心のリアルクローズを、ジャストタイムに消費者に送り届け続け、世界進出を着実に進めるユニクロ。

一方のグッチも、「今という時代どもに生きている」と実感したいファッショニスタを安心させるモード必需品を、旬に的確に出してくる。

リーダ・ジャンニーニが提案する男性像女性像も、今この瞬間の時代の気分をはずしていない。メンズのデビューコレクションとなつた二〇〇七年春夏ミラノコレクションでは、カラフルで光沢感に溢れた「グッチ・ガイ」を登場させて話題になつた。対する「グッチ・ガール」はグラマラスで樂天的。フリーダがトランジショングenderー感性で創りあげたグッチ・ガイとグッチ・ガールの間に漂うのは、セクシユアルな緊張感よりもむしろ、陽氣でリラックスした「艶やかなお友達」感に近い。

そんな時流に乗るライブ感とともに、このブランドにはどこか人間的な淒みを感じるのだが、それはブランドの歴史と無縁ではない。エレベーター・ボーイから立身した創業者グッチオ・グッチの後継者が三代にわたって繰り広げた、スキヤンダラスな骨肉の争い。映画会社・バラマウントがリドリー・スコット監督で映画化することを決定したほど（二〇〇八年公開予定）の壮絶な争いである。そして記憶に新しいのは、CEOドメニコ・デ・ソーレとクリエイティブ・ディレクター、トム・フォードの時代にLV M Hグループとの間で繰り広げられた、華麗で熾烈なブランド戦争……。

トレンドど真ん中のラグジュアリーに、怜悧で戦略的なヒューマンパワーが見える隠れする。このあたりに、成熟した世代でも軽薄に見えることなく安心して身を委ねることができる「コンサバな最先端」ブランド、グッチの魅力の秘密がありそうです。

21年、グッチオ・グッチが旅行鞄や馬具などの高級革製品を売る店としてファレンツェに「オープン」。アシズィム独裁政権のとき、材料の革の不足を補うために異素材を用いた画期的なデザインを考案。このとき誕生したのが、竹革を組合わせた「バンブーバッグ」。1950年代には、創始者のイニシャルのGGロゴが登場。その後、「ジャッキー・バング」「フローラ」など、グッチのクラシックラインを次々と生み、それらはオードリー・ヘプバーン、グレース・ケリーなど、セレブたちにも愛用された。94年、トム・フォードが「グリエイティーヴ・デイレクター」に就任し、グラフィカルな仕事は、ファッション業界を革新。2005年3月アクセサリーデザインに留まらずブランド全体のイメージをコントロールした彼の仕事は、ファッション業界を再び「デイレクター」に加え、ウイメンズウェアの部門に加え、クリエイティブ・デイレクターに新設された。2005年3月アクセサリーデザインに留まらずブランド全体のイメージをコントロールした彼の仕事は、ファッション業界を再び



新しいグッチの顔、 フリー・ダ

弱冠33歳でクリエイティヴ・ディレクターに就任。生粋のローマっ子である彼女は、伝統にオマージュを捧げつつ、それに現代の感覚を融合させ、新たなゲーミングの世界を築く。

85周年記念限定コレクション

創業85周年を記念し、特別プレートが付いた限定コレクションのハンドバッグを7月より発売

